文化財ノート No.46

小沢城跡

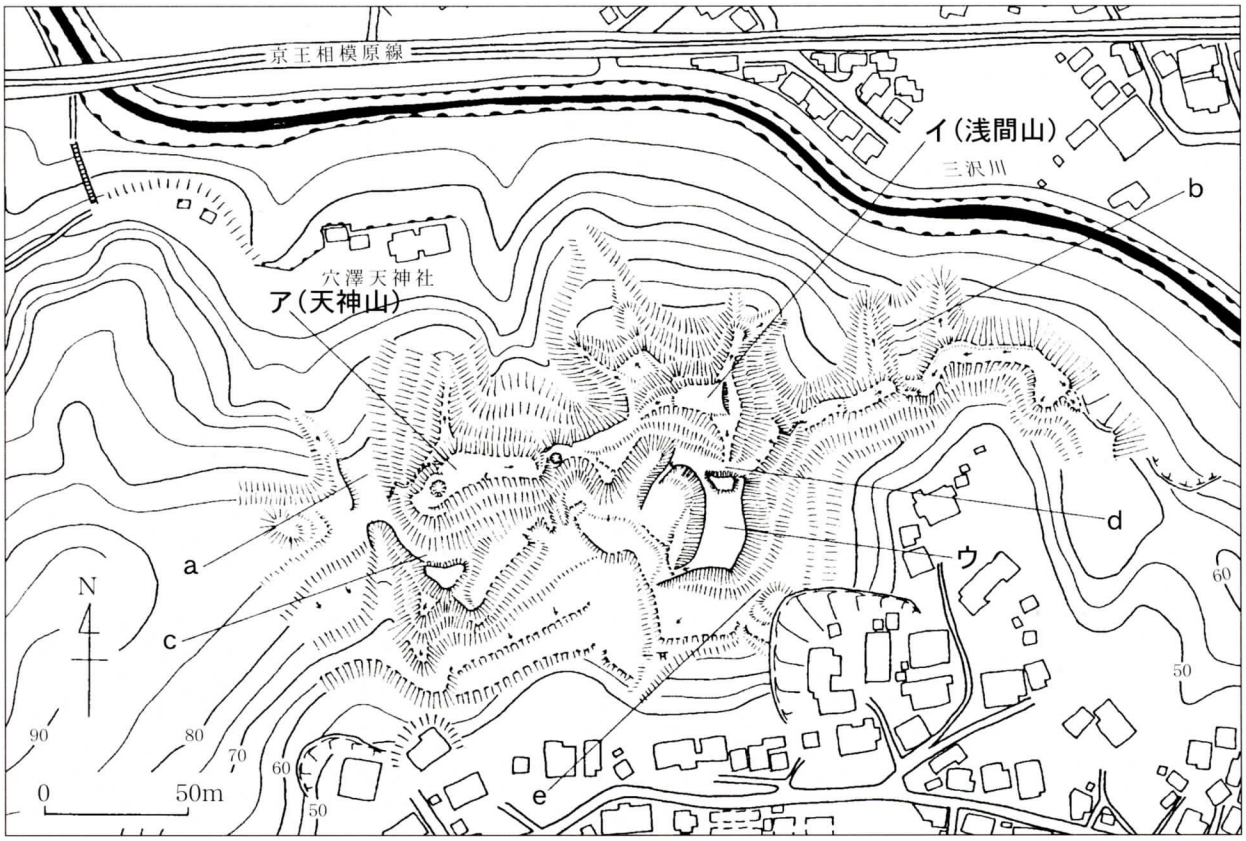
稲城市教育委員会
生涯学習課
稲城市東長沼2111
☎042－378－2111
発行　2004. 2. 10

矢野口の丘陵部にのこる小沢城跡

矢野口の穴澤天神社南側の丘陵地に中世の山城の跡が残っています。この城跡は、通称「小沢城」と呼ばれていて、鎌倉時代初期の豪族であった稲毛三郎重成の子の小沢二郎重政（小太郎）の居城の跡といわれています。穴澤天神社の西側から京王相模原線のガードを潜って山道を登って行くと、約15分ほどで丘陵の尾根筋にでます。ここからやや東側一帯の丘陵地が小沢城跡になります。この当時の中世の山城は、丘陵の頂部に見張り台をおいて敵の監視を行い、居住地は丘陵の麓におく場合が一般的であり、小沢城もこのような形の城であったと思われます。この小沢城が位置する場所は多摩丘陵の頂部で、現在ではちょうど稲城市と川崎市の境界にあたります。北側の多摩川の沖積面との比高差は約50m余りあります。

小沢城跡は、正式な発掘調査は行われていませんが、神奈川県の考古学者・赤星直忠氏による昭和40年の踏査及び、稲城市史編さん事業による、松岡進氏・中山文人氏の踏査（昭和63年）によって、城跡の遺構がしだいに明らかになってきました。城跡は、天神山（図のア）と浅間山（イ）という二つの頂（標高約87ｍ）を中心にして広がっており、図のようにａ～ｅの地点から堀切跡と思われる遺構が確認されています。ただし、これらの遺構は発掘調査による確認ではなく、現地を地表観察して確認したものなので、確実な遺構とは言い切れないところもあります。特に浅間山からさらに東側に位置するｂは、尾根上を掘り切っていないので、堀切跡としてよいか検討の余地を残します。図のウは、東側に位置する平坦部を有する尾根で、周囲を明確な壁で囲まれており、「馬場」という地名で呼ばれていました。

小沢城が築かれた鎌倉時代には、市域のほとんどは小沢郷と呼ばれていました。当時、多摩川流域には武蔵七党と称された武士団が群立していました。なかでも市域の周辺には秩父党、横山党、西党の三党があって、武蔵国の国衙や官牧などと関連して発展を遂げていました。市域にはこのなかの秩父党の

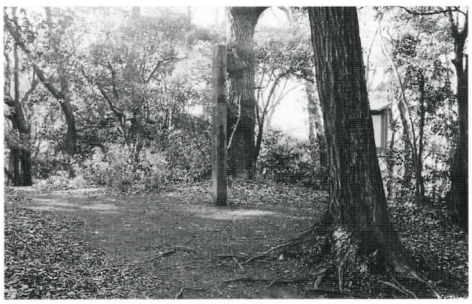


小沢城縄張図（松岡進氏作図、1988年調査）

小山田（おやまだ）一族が進出していました。小山田一族の重成は、拠点の小山田荘から稲毛荘（そう）に進出し、小山田重成から稲毛重成と名前を変えました。さらに近くの小沢郷にも進出して、子の重政に管理をさせ、その地名を姓として小沢重政としました。鎌倉幕府の歴史書である吾妻鏡（あづまかがみ）には、稲毛重成らの名はでてきますが、小沢城に関する記載は見られません。当時、小沢重政の居城としてどのように使われたのかは、明らかではありません。重成・重政父子は、元久２年（1205）に、北条氏によって滅ぼされます。鎌倉幕府の実権は北条氏が握るようになり、北条氏による武蔵国の直轄支配がはじまります。そして小沢城も北条氏の支配下に組み込まれていきました。

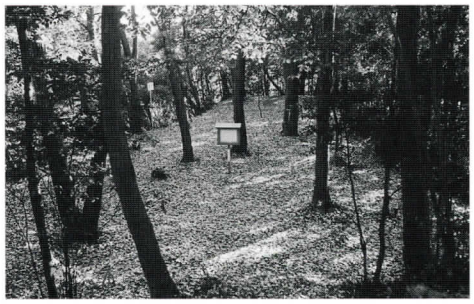
その後、小沢城が文献史料のなかに登場するのは、南北朝内乱の時期になってからです。観応２年・正平６年（1351）に足利尊氏は、鎌倉にいた足利直義を討つために、東へ下りますが、この尊氏の行動に呼応して上野国（群馬県）から鎌倉へ向かったのが、薬師寺公義でした。敵は関東管領（かんれい）で武蔵守護（しゅご）であった上杉憲顕であったようです。当時、直義軍が府中と小沢城に陣を取り、鎌倉へ進軍していた薬師寺軍を迎え撃とうとしていました。観応２年２月に薬師寺軍は、府中に押し寄せ、ついで小沢城を攻めて焼き払ったということです。多摩川の対岸に府中があることもあって、小沢城を含めて、この周辺地域が鎌倉を守護する重要地点であったことがわかります。

参考文献.『稲城市史上巻』（稲城市）



天神山の頂上部

Ｃの堀切跡



ウの馬場と呼ばれる平坦部